

不毛なる「清潔」と豊穡なる「不潔」

——「キリマンジャロの雪」における創作と衛生——

勝井 慧

(2016年10月12日 受理)

Barren Cleanliness and Productive Dirtiness

—— Creativity and Sanitation in “The Snow of Kilimanjaro” ——

Kei KATSUI

Abstract

In this paper, I would like to examine the images of barren cleanliness and fertile dirtiness for a writer through the contrast between the descriptions of “dirtiness” that surround the protagonist Harry and of “cleanliness” related with his wife Helen in Ernest Hemingway’s short story, “The Snow of Kilimanjaro.”

Throughout his life as a writer, Hemingway continued to pursue the subject of life and death by using the motifs of cleanliness and dirtiness. He basically correlated “cleanliness” with life, health, morality, and peace, while considering “dirtiness” in relation to death, illness, immorality and war.

In this short story, however, “cleanliness” plays an ironical role as the destroyer of a writer’s “life.” On the other hand, “dirtiness” is represented as a symbol of the productiveness by the writer even though the very “dirtiness” causes Harry’s death. By putting a focus on the various images of “cleanliness” and “dirtiness” in Harry’s retrospections on Europe and in his present environment in Africa, I would like to clarify the contradictory meanings of “cleanliness” and “dirtiness” in “The Snow of Kilimanjaro.”

Keywords: ヘミングウェイ, 「キリマンジャロの雪」, 清潔, 不潔

1. ヘミングウェイと「清潔」と「不潔」

医師の息子として生を受け、赤十字傷病兵運搬車の運転手として第一次世界大戦で悲惨な死の現場を目の当たりにし、自身も爆撃によって重傷を負ったアーネスト・ヘミングウェイ (Ernest Hemingway) は、生涯にわたって人間の生と死を描き続けたが、その際重要な役割を

担っているのが「清潔」と「不潔」のモチーフである。ヘミングウェイの作品において、「清潔」と「不潔」にまつわる描写は単に登場人物の置かれた状況を説明するだけでなく、物語の結末を予感させる予兆であり、さらには語り手の直接語られることのない感情や価値観を代弁するものとしても機能している。

例えば、第一次世界大戦での経験を踏まえて執筆された初期の代表作『武器よさらば』(*A Farewell to Arms*, 1926) の冒頭では、“The trunks of the trees too were *dusty* and the leaves fell early that year and we saw the troops marching along the road and the *dust* rising” (*FTA* 3, *italics mine*) というように、“*dust*”にまみれた木から例年より早く葉を落とす様に、“*dust*”を巻き上げながら戦場へと行進する兵士たちの姿が描かれるが、この“*dust*”の繰り返しは、キリスト教の葬儀の際に唱えられる“ashes to ashes, dust to dust”という聖句を想起させ、兵士たちを待ち受ける「死」を予感させるものである。

さらにこの序章は“At the start of the winter came the permanent rain and with the rain came the cholera. But it was checked and in the end only seven thousand died of it in the army” (*FTA* 4) という描写で幕を閉じる。コレラはコレラ菌の経口感染により激しい嘔吐と下痢を起し、強い脱水症状によって死に至る場合もある感染症である。不衛生な環境で蔓延することが多いため、通常夏に発生することの多い感染症であるが、長雨のために冬にコレラが蔓延したという事態は、雨によってあふれた排泄物などによって戦場の衛生状態が悪化したことを物語っている。主人公フレデリック・ヘンリーはこのような前線を“hot and dirty” (*FTA* 23) であると語るが、雨と同様、暑さも汚れも死に至る病をもたらす「不潔」さの要素の一つである。

不潔さと死に満ちた戦場とは対照的に、戦場で爆撃を受け重傷を負ったフレデリックが運ばれる病院は“It was dim and cool in the room” (*FTA* 83), “I lay with a clean smooth sheet under me” (*FTA* 85) と描写され、戦場にはなかった「涼しさ」と「清潔」さが強調される。フレデリックはその病院で看護師の補佐役として働いていたキャサリンと恋に落ち、戦場からの逃避行を図るが、その行先として選んだスイスもまた、“it sled cheerful and clean even with the rain. (*FTA* 277), “We went inside the cafe and sat down at a *clean* wooden table. We were cockeyed excited. A splendid *clean-looking* woman with an apron came and asked us what we wanted. (*FTA* 278) というように、「清潔」さを繰り返し強調することで、「不潔」な死に満ちた戦場から遠く離れたことを示唆している。

冷たく、清潔なスイスの山は、ちょうどフレデリックが戦場で出会った敬虔な神父が自身の故郷のことを“There is good hunting. You would like the people and though it is *cold* it is *clear* and *dry*” (*FTA* 9) と述べていることと呼応する。このように、戦場から離れた平和な土地は“cool”, “cold”, “clear”, “clean”, “dry”といった「清潔」さに関連した言葉で描写され、それ

は物理的な「清潔」さのみならず、生命や信心深さ、道徳性とも深く結びついている。その一方で、戦場の“dusty”, “dirty”, “hot”, “wet”という「不潔」さは戦場に疫病を蔓延させる物理的な「死」や、戦争をもたらす破滅や不道徳とも関連付けられている。

『武器よさらば』から11年後に書かれた後期の代表的長編『誰が為に鐘は鳴る』(*For Whom the Bell Tolls*, 1940)でも、「不潔」と死、「清潔」と生は強固に結びついている。占いや予兆を信じるスペイン人のピラルは“I saw death there as plainly as though it were sitting on his shoulder. And what is more he smelt of death”(FWBT 251)と述べ、人間の死を予言する不吉な「死の匂い」について、主人公ジョーダンに語る。さらに、ピラルは「死の匂い」がどのような匂いであるのか、具体的に説明し始める。

“... the old women who go before daylight to drink the blood of the beasts that are slaughtered ... thou shouldst continue to walk through the city and down the Calle de Salud smelling what thou wilt smell where they are sweeping out the casas de putas and emptying the slop jars into the drains and, with this odor of love's labor lost mixed sweetly with soapy water and cigarette butts only faintly reaching thy nostrils,... an abandoned gunny sack with the odor of the wet earth, dead flowers, and the doings of that night.” (FWBT 255-56)

このように、「屠殺場で殺された動物の血を飲む老婆」の匂いや、「娼婦がベッドの代わりとして使った枯れた花と土の匂い」といった、さまざまな「不潔」な匂いの集合体とし「死の匂い」は表現されている。ジョーダンは始めはこの「死の匂い」をただの迷信であるとして取り合おうとしないが、やがてその不吉かつ「不潔」な匂いを打ち消すように、「清潔」な匂いを求めるようになる。たとえば、恋人のマリアが近づいてくると“he picked it [Maria's hand] up with his left hand and lift it to his face and smelled the coarse soap and water freshness from her washing of the dishes”(FWBT 226)というように、洗い物をしていたマリアの手を取り、その手から「粗い石鹸と水のさわやかさ」を嗅ぎ取るという行動に出る。さらに松の林の中では“He smelled the odor of the pine boughs under him, the piney smell of the crushed needles and the sharper odor of the resinous sap from the cut limbs. Pilar, he thought. Pilar and the smell of death. This is the smell I love”(FWBT 260)とあるように、自分が好む「松」の木の爽やかな匂いを「死の匂い」と対立する香りと考えている様子が描かれている。このようなジョーダンの行動は、「清潔」な匂いを嗅ぐことで、「不潔」な「死の匂い」を遠ざけようとする意図があると考えることができる。

このように、ヘミングウェイ作品の主人公たちは、基本的に死を象徴する「不潔」さを遠ざ

け、生を求めるために「清潔」さを追い求める傾向にあるといえる。主人公の感情を表面化させない、いわゆる「ハード・ボイルド・スタイル」と呼ばれるヘミングウェイ特有の文体において、「清潔」と「不潔」の描写は、実は主人公の心情を投影する鏡としての役割をになっているのである。

しかし、この「清潔」と「不潔」の図式は決して固定されたものではない。本論ではヘミングウェイの代表的短編小説「キリマンジャロの雪」(“The Snow of Kilimanjaro,” 1936)に焦点を絞り、主人公ハリーを取り巻く物理的「不潔」および回想シーンにおける追憶の「不潔」と、妻ヘレンにまつわる「清潔」さをたどりながら、一見単純で図式的な二項対立のように思われがちな「清潔」と「不潔」、生と死というモチーフが、物語が展開するにつれ逆説的に交錯して行く様を読み取って行きたい。

2. 不毛な「清潔」と豊穡な「不潔」

先ほど紹介した『武器よさらば』と『誰が為に鐘は鳴る』という二つの代表的長編の間には、ヘミングウェイは11年もの長いスランプ状態にあったといわれている。この空白の時期に書かれながら、ヘミングウェイの短編の中でも特に名作として評価される「キリマンジャロの雪」は、二つの長編のそれぞれに見られる「清潔」と「不潔」のモチーフを橋渡しする、ちょうど過渡期の作品であると考えられる。

「キリマンジャロの雪」において、ハンティングをするためにアフリカ旅行に来ながら、足を負傷してベッドに横たわる主人公ハリーを取り巻く「不潔」と、妻のヘレンにまつわる「清潔」なイメージとが対比的に描かれている。作品の冒頭、ハリーは壊疽を起こした自分の足の「匂い」について、“Absolutely. I’m awfully sorry about the odor though. That must bother you” (CSS 39) と述べ、その悪臭を気にする様子が描かれている。そして、“Now is it sight or is it scent that brings them [animals] like that?” (CSS 39) と述べ、横たわっている自分の姿が、あるいは壊疽を起こした脚の「匂い」に惹きつけられてハイエナやハゲワシといった死肉をあさる動物たちが集まってきているのではとハリーは考える。ハゲワシは“the huge, filthy birds” (CSS 40)、ハイエナは“a filthy animal though.” (CSS 47) として、繰り返し「汚れた」(filthy) 動物であると言及されており、ハリーはまさに「不潔」さの渦中にいると言える。

やがてハリーは自身に死が迫っていることを予感するが、その際、“it occurred to him that he was going to die. It came with a rush; not as a rush of water nor of wind; but of a sudden evil-smelling emptiness and the odd thing was that the hyena slipped lightly along the edge of it” (CSS 47, italics mine) と描かれているように、壊疽を起こした脚の腐敗臭は死を予感させる不

吉な予兆として機能する。その匂いはついには“death had come and rested its head on the foot of the cot and he could smell its breath ... “You’ve got a hell of a breath,” he told it. “You stinking bastard” (CSS 54) とあるように、死神の口から放たれる「悪臭」となって死に行くハリーに覆いかぶさって来る。このように、本作における「不潔」な匂いは、『誰がために鐘は鳴る』に描かれる「死の匂い」へとつながる、死の予兆として描かれているといえる。

ハリーを死に至らしめる脚の壊疽は、そもそも“I suppose what I did was to forget to put iodine on it when I first scratched it. Then I didn’t pay any attention to it because I never infect. Then, later, when it got bad, it was probably using that weak carbolic solution when the other antiseptics ran out that paralyzed the minute blood vessels and started the gangrene” (CSS 41) とハリー自身が説明しているように、サバンナでひっかき傷を作った時にヨードチンキ (iodine) で消毒するのを忘れたために引き起こされたものである。すなわち、消毒の不完全さによって傷口が腐敗菌に感染するという「不潔」さがもたらす壊死によって、ハリーは死に至るのである。

「不潔」さに取り巻かれているハリーとは対照的に、妻ヘレンの周囲には「清潔」と関連した物が繰り返し描かれる。サバンナでのハンティングから戻ったヘレンに対し、病床に横たわるハリーは“You’d better put on your mosquito boots” (CSS 47) と声をかける。モスキート・ブーツとはマラリアを媒介する蚊を防ぐための革製のロングブーツであり、20世紀初頭のアフリカ旅行の際には必需品とされた製品である。つまり、脚の怪我から細菌に感染し、壊疽を起こした夫とは対照的に、ヘレンは自らの脚を感染から守る「清潔」な装備を持っていると言える。

さらに、モスキート・ブーツをはくようにというハリーに対し、ヘレンが“I’ll wait till I bathe” (CSS 47) と答えていることから、彼女はサバンナでのキャンプの最中であるにもかかわらず、「入浴」を行っていることがわかる。ヘミングウェイのアフリカ旅行記である『アフリカの緑の丘』(*Green Hills of Africa*, 1935) においても、サバンナでの入浴の様子が描かれているが、キャンパス地の浴槽にはったお湯が冷めないうちに早く風呂に入ってくれと、繰り返しせつつかれていることから、サファリの最中に湯を沸かし、入浴することが大変な作業であることがうかがえる。怪我をしたハリーが服を着替えたただけであるのに対し、入浴を行うヘレンの行動はアフリカの“hot”かつ“dusty”な環境の持つ「不潔」さから身を守るようでもあり、また都市の生活スタイルを維持しようとする行動のようにも読み取れる。

実際、ヘレンはハリーに対し、“I wish we’d never come ... You never would have gotten anything like this in Paris. You always said you loved Paris. We could have stayed in Paris or gone anywhere. I’d have gone anywhere. I said I’d go anywhere you wanted. If you wanted to

shoot we could have gone shooting in Hungary and been comfortable” (CSS 41) とアフリカに
来たことへの不満を述べ、パリかハンガリーにいればこんなことにはならなかったと告げるこ
とからも、彼女が野性的なアフリカよりも清潔なヨーロッパの都市を好んでいることが示唆さ
れる。さらに、ハリーが死に至る直前、ヘレンがロングアイランドの家で娘の社交界デビュー
の用意をしている夢を見ている様が描かれていることから、彼女が本質的にアフリカの自然
よりも、欧米の都市生活を求めていることは明白である (CSS 56)。

3. 不毛なる「清潔」と豊穡なる「不潔」

ヘレンが象徴する「清潔」な都市生活は、スランプに陥ったハリーが作家としての再起を図
るため訪れた「不潔」さを含んだアフリカの自然と対照を成していると言える。ハリーは自身
の創作能力が衰えた理由は自分の怠慢のせいであると自覚した上で、“this rich bitch, this kindly
caretaker and destroyer of his talent” (CSS 45) というように、財産を持った裕福なヘレンとの
生活が彼の作家としての能力を鈍らせ、破壊したと考える。そして、はじめは小説の題材にし
ようとしていた富裕層の生活も、“the rich were dull and they drank too much, or they played
too much backgammon. They were dull and they were repetitious” (CSS 53) というように、
最終的には退屈なものであるため小説に書くことはないだろうハリーは結論づける。いわば、
ヘレンが代表するアメリカやヨーロッパの都市での裕福な生活は、傷口が壊死するような物
理的な「不潔」さは持たないものの、その安寧と平穏は小説を産むことのない不毛な「清潔」
さであり、作家としてのハリーの創造性を壊死させてきたと言えよう。

妻ヘレンの「清潔」さと対照的に、病床でハリーが回想する、いつか小説にしようとあたた
めてきた過去の記憶は、死、戦争、不道德に満ちた「不潔」さの記録でもある。回想は大きく
3つに分けることができる。第一の回想では雪と死にまつわる思い出が描かれる。雪は降って
いないという誤った情報によって、多くの人々が雪山を進んで死亡した出来事が語られ、さら
に雪の中を血まみれになって逃げてきた脱走兵が助けをもとめたこと、そしてクリスマスに休
暇で故郷に帰るオーストリアの軍人を飛行機から機関銃で撃った男が仲間から「お前は人でな
しだ」と責められたことが次々と回想される (CSS 42)。雪という“cool”, “cold”, “clean” の
要素を持った「清潔」さを背景とすることで、戦争と死の「不潔」さがより克明に浮かび上が
ります。

第二の回想ではハリーが不倫相手の恋人とパリで喧嘩をしたあと、一人でコンスタンチノー
プルへ行き、そこで幾人もの娼婦と過ごし、寂しさを紛らわせたことが語られる。そして、列
車でパリに戻る道中、ハリーはギリシャ軍とトルコ軍の戦闘を目撃するが、そこであまりに悲

惨な戦場を目の当たりにしたため、パリに戻ってからもその時の出来事を小説に書くことも口にすることもできないほどの衝撃を受ける (CSS 48-49)。

第三の回想はハリーの少年時代と作家としての修業時代のものであり、そこにも死や不道德といった「不潔」さが満ちている。少年時代に訪れた森と丘に囲まれたログハウスは、火事で焼け落ちてしまう。そして、第一次世界大戦後、ドイツの黒い森で友人たちと釣りに行った際、ハリーたちが宿泊したホテルのオーナーは、インフレの影響を受け、ホテルを運営することができず自殺してしまう。そして、若きハリーが作家としての修行生活を送った日々の思い出が以下のように連綿と語られる。その思い出があまりに不道德であるため、これまでの回想は口述筆記することができるが、このパリでの思い出は口述では描けないとさえハリーは言う。

You could dictate that, but you could not dictate the Place Contrescarpe where the flower sellers dyed their flowers in the street and the dye ran over the paving where the autobus started and the old men and the women, always drunk on wine and bad marc; and the children with their noses running in the cold; the smell of dirty sweat and poverty and drunkenness at the Café des Amateurs and the whores at the Bal Musette they lived above... the cheap tall hotel where Paul Verlaine had died. There were only two rooms in the apartments where they lived and he had a room on the top floor of that hotel that cost him sixty francs a month where he did his writing, and from it he could see the roofs and chimney pots and all the hills of Paris. (CSS 51)

このように、作家修行中のハリーがパリで目にしたのは道端で花を染めて売る花売りや、酔っぱらった老人たち、鼻を垂らした子供たちや娼婦といった人々であり、彼らの匂いは「汚れた汗と貧困の匂い」であると表現される。そんな中、ハリーはヴェルレーヌが死んだといういわくつきの安ホテルに部屋を借り、「不潔」な、しかし活気に満ちたパリで小説を執筆したのである。

以上のように、ハリーが創作の源として回想する記憶は、いずれも死、戦争、不道德といった「不潔」さに満ちている。しかし、それは単に忌むべきものではなく、物語を産みだす豊饒な「不潔」さであると言える。本作の冒頭には次のような有名なエピソードが掲げられている。

“Kilimanjaro is a snow-covered mountain 19,710 feet high, and is said to be the highest mountain in Africa. Its western summit is called the Masai “Ngdije Ngdi,” the House of God. Close to the western summit there is the dried and frozen carcass of a leopard. No one has explained

what the leopard was seeking at that altitude. (CSS 39)

このキリマンジャロの山頂に横たわる「凍りつき、干からびた豹の死体」が何を表しているのか、その意味はさまざまに解釈することができるが、「清潔」な雪の中にあることで一層際立つ「死」という「不潔」さを帯びながらも、腐敗することのない理想の小説の源、つまり豊饒な「不潔」の象徴であると見なすこともできよう。

そもそもハリーがアフリカに赴いた理由は“there was no luxury and he had thought that he could get back into training that way. That in some way he could work the fat off his soul the way a fighter went into the mountains to work and train in order to bum it out of his body” (CSS 44) であると説明されている。すなわち、「贅沢さのない」「最低限の快適さ」のみの生活をアフリカで行うことで、ハリーは魂についた脂肪を落とそうとするが、それはヘレンとの贅沢で不毛な「清潔」さに満ちた生活から離れ、都会にはない物理的な不潔さの中に身を置き、さらにハンティングによる動物の「死」という豊饒なる「不潔」と向き合うことで、失われた創作力を取り戻そうとしたと考えることが出来る。

しかし、結果は皮肉なものとなる。ハリーはようやく到着した飛行機に乘せられ、“and there, ahead, all he could see, as wide as all the world, great, high, and unbelievably white in the sun, was the square top of Kilimanjaro. And then he knew that there was where he was going” (CSS 56) とあるように、雪に覆われ、白く輝くキリマンジャロの頂に向かう夢を見る。しかし、その夢を見る実際のハリーの肉体は壊死のために地上で死に至ることとなる。ハリーの魂の浄化となるはずであったアフリカ旅行は、なぜ肉体の腐敗と死という結末を迎えるのだろうか。その理由として、ハリーの「不潔」さに対する姿勢が挙げられる。ハリーが脚を負傷した状況は次のようなものである。

“And now this life that she had built again was coming to a term because he had not used iodine two weeks ago when a thorn had scratched his knee as they moved forward trying to photograph a herd of waterbuck standing, their heads up, peering while their nostrils searched the air, their ears spread wide to hear the first noise that would send them rushing into the bush. They had bolted, too, before he got the picture” (CSS 46)

すなわち、ハリーはハンティングという動物と自分の命をかけて互いの死という「不潔」さと向き合う行為の最中に傷を負うのではなく、カメラで羚羊を撮影しようとした際のかすり傷の感染が原因で脚が壊疽にかかってしまうのである。仮にハリーがライオンをしとめようとし、

その際に負った傷が原因で壊疽にかかっていたならば、彼の死が持つ意味はまったく異なるものであったかもしれない。しかし、銃を猛獣に向けることで死という「不潔」さと対峙するという危険を避け、カメラを草食動物に向けるという、より「安全」な方法で野生に触れようとするハリーの行動は、創作の源である豊饒な「不潔」と向き合う姿勢であるとは言えない。Kenneth G. Johnston が “the middle-aged writer does not adventure forth from his ‘safe’ and comfortable habitat to risk the unknown; to test his strength, endurance, and discipline” (Johnston 225) と指摘するように、「快適さ」と「安全」を手放すことのできない中年作家となったハリーには、もはやキリマンジャロの山頂に凍りつく豹のような高みへと至る力はない。

注目したいのはハリーの脚が感染した理由はヨードチンキを塗り忘れたからだ、と最初に説明されるが、最終的に「壊疽」(gangrene) が始まった原因は次のように語られる。

“I suppose what I did was to forget to put iodine on it when I first scratched it. Then I didn’t pay any attention to it because I never infect. Then, later, when it got bad, it was probably using that weak carbolic solution when the other antiseptics ran out that paralyzed the minute blood vessels and started the gangrene.” (CSS 41)

つまり、「石炭酸水溶液」(carbolic solution) を使用し、血管が「麻痺」してしまったからだ、とハリーは述べているのである。石炭酸水溶液は第一次世界大戦においても使用された消毒薬であるが、本来は医療器具の消毒用であり、人体に用いると酸が正常な白血球まで殺してしまうため、かえって傷口が壊死する危険があるといわれている。ハリーの傷の感染はヨードチンキを塗り忘れた「不潔」さに起因するが、それを死に至る壊疽へと悪化させてしまったものは、不潔さではなく、消毒液のもたらす過剰な「清潔」さであったと言えるのである。

この「麻痺」をもたらす「清潔」さは、ヘレンが象徴する金持ちの「清潔」な都市生活が「退屈」(dull) な繰り返しに満ち、ハリーの創作力を「鈍く」(dull) 麻痺させてしまった点と呼応する。多くの研究者が本作をハリーの精神的、身体的「腐敗」の物語であると述べているが、彼の陥った精神的、身体的「腐敗」は、ヘミングウェイ作品における「不潔」さ、すなわち、戦争、死、病、不道德に彼が触れたことで生じたのではなく、むしろそういった「不潔」さに直面することを恐れ、「清潔」で快適な生活によって「不潔」さを消毒しようとしたために陥った「麻痺」状態から、生きたままの「腐敗」へと転じて行ったのではないだろうか。

4. 結 論

ヘミングウェイは Lilian Ross とのインタビューの中で、戦争の恐怖が癒え、それを書くことができるまでに10年かかった、と述べているが、戦争や死の恐怖という「不潔」さを小説として描き出すことができるまで時間をかけ自らの内に取り込むことこそ、「不潔」さを「浄化」する作業であると言える。ハリーが陥ったような「清潔」さによって「不潔」さを打ち消す「消毒」は「浄化」とはまったく異なるものであり、作家としての創作性をむしろ殺してしまう危険な行為であると言えよう。Carlos Baker は“The dying writer of the story was an image of himself as he might have been. Might have been, that is, if the temptation to lead the aimless life of the very rich had overcome his integrity as an artist” (Baker 289) と述べているように、贅沢の中で感覚を麻痺させ、生と死に向き合うことを恐れるあまり、作家としても人間としても死に行く作家ハリーは、『武器よさらば』以降のスランプに苦しんでいたヘミングウェイ自身の分身であるといえる。

1920年代に自身の生々しい戦争体験や少年時代の瑞々しい記憶などを題材に貧しい若手作家として書き上げた『日はまた昇る』や『武器よさらば』は好評を博し、ヘミングウェイを20世紀最大のアメリカ作家の一人へと押し上げて行く。作家としての成功をおさめたヘミングウェイが釣りや狩りを得意とするマッチョでハードボイルドなイメージのセレブリティとなり、裕福で「清潔」な生活を送ることができるようになった一方、文学作品に昇華できるような生の経験が不足して行ったことは明らかである。楠本隆は「1920年代のいわゆるロスト・ジェネレーション時代の風潮に乗った彼のベル・エポック、『われらの時代』はもう週末を告げていた。若い感性が勝ち取った体験、パーソナルなものは、ほぼ書き尽しており、作品世界を満足させる材料が枯渇していたのがこの時期である」(楠本 86) と述べているように、スランプを抜け出すための新たな作品素材と体験を手に入れるため、ヘミングウェイはアフリカでのライオン狩りに打ち込んだといえる。その結果、ヘミングウェイの短編作品の中でも特に人気の高い、「フランシス・マカンバーの短く幸福な人生」(“The Short Happy Life of Francis Macomber,” 1936) と本作「キリマンジャロの雪」というアフリカを舞台とした短編が生み出されることになる。

1920年代に執筆された『日はまた昇る』や『武器よさらば』ではいずれも周辺の登場人物やヒロインが死亡しても主人公は生き残るのに対し、1930年代以降の代表作「フランシス・マカンバーの短く幸福な人生」と「キリマンジャロの雪」、そして『誰がために鐘は鳴る』において、主人公がいずれも死亡している点は、1930年代以降のヘミングウェイ作品を捉える上で無視す

ることのできない傾向である。1920年代の若きヘミングウェイが描く主人公は恋人や友人たち、そして名もなき人々の死、病、戦争、不道德という自身を取り巻く「不潔」の中で、物理的、精神的「清潔」を追い求め、自らの「生」を勝ち得たと言える。しかし、作家としての成功を手にし、「清潔」な生活を手にしたヘミングウェイにとって、作品を生み出す源となる「不潔」は外部ではなく、主人公自身の内に見出すべきものとなったのであろう。

小説を生み出す豊饒な「不潔」を求めながら、過剰な「清潔」がもたらす麻痺によって生きながら腐敗し、死んでゆくハリーはヘミングウェイの作家としての苦しみとの投影であると同時に、「麻痺」しはじめていたヘミングウェイの作品に新たな「生」と「死」の躍動を与える、一種の供物としての役割を果たしているといえよう。また、ハリーの死は不潔な「死の匂い」によって自らの死を予告され、「清潔」と「不潔」の狭間で葛藤する主人公という『誰がために鐘は鳴る』のジョーダンへと続いてゆく、新たな豊饒な「不潔」の一端ともなったのである。

中野孝次は文学を書くという行為を「現実という必然の連鎖の中に居心地よくなじんでいる自己の生を、むりやり引き剥がすこと、自己を容赦なく他者の前に晒す自殺行為を自己に課すること、そして死の『暗い海』の前に、あるいは『永遠の氷雪』地帯の上においてその意味を問うことだ」(中野 57) と述べている。朽ちることのない豹の遺骸が横たわるキリマンジャロの頂きへ向かう夢の中で死ぬハリーは、まさに文学によって永遠にその名を刻もうとするヘミングウェイが、1961年に猟銃で自らの命を絶つまでの25年の間に、幾度も繰り返すことになる「自殺行為」の始まりだったのかもしれない。

Works Cited and Consulted

- Baker, Carlos. *Ernest Hemingway: A Life Story*. New York: Scriber, 1969, Print.
- Duffy, John. *From Humors to Medical Science: A History of American Science*. Urbana: U of Illinois P, 1993, Print.
- . *The Sanitarians: A History of American Public Health*. Urbana and Chicago: U of Illinois P, 1992, Print.
- Gajdusek, Robert E. “Purgation/Debridement as Therapy/Aesthetics.” *Hemingway Review* 4 (1985): 12–18, Print.
- Hemingway, Ernest. *The Complete Short Stories of Ernest Hemingway*. New York: Scribner, 2003, Print.
- . *A Farewell to Arms*. 1929. New York: Scribner, 2003, Print.
- . *For Whom the Bell Tolls*. 1940. New York: Scribner, 2003, Print.
- . *Green Hills of Africa*. 1935. New York: Scribner, 1998, Print.
- Johnston, Kenneth G. “‘The Snow of Kilimanjaro’: An African Purge.” *Studies in Short Fiction* 21 (1984): 223–228, Print.
- Maynard, Raid. “The Decay Motif in ‘The Snow of Kilimanjaro’.” *Discourse* 10 (1967): 436–439, Print.
- Ross, Lillian. *Portrait of Hemingway*. New York: Simon and Schuster, 1961.

- 新井哲男 「臭気からの脱出：「キリマンジャロの雪」小論」, 『英語英文学研究』 第1巻 (1995): 32-41, Print.
- . 「ヘミングウェイにおける『清潔』な場所について」, 『英語英文学研究』 第2巻 (1996): 42-55, Print.
- 楠本 隆 「キリマンジャロの死—『キリマンジャロの雪』 について」, 『近畿大学教養部研究紀要』 第21巻 2号 (1982): 85-101, Print.
- ジェッター, ディーター. 『西洋医学史ハンドブック』, 山本俊一訳, 朝倉書店, 1996, Print.
- 中野孝次 『文学への希望』 東京: 朝日新聞社, 1979, Print.